



福岡先生の御両親が作ってくださった門松

蒨雲

大口高校だより



鹿児島県立 大口高等学校

〒895-2511 伊佐市大口里2670

TEL 0995-22-1441 FAX 0995-22-9227

新年のご挨拶

明けましておめでとうございます。令和7年という年が穏やかで幸せな年となりますよう、心からお祈り申し上げます。

さて、昨今の高校教育をめぐる様々な動きの中で、我が大口高校も大胆にそして着実に進化しつつあります。まず、**念願であったスクールバスの利用を可能にしました。**旧山野中学校区と旧大口南中学校区から通学する大口高校生は、大口中央中学校のスクールバスに乗ることが可能になり、大雨や雪の日も安心・安全に通学できるようになりました。

入試制度では、今年から「自己推薦」を導入します。従来の「学校推薦」は、主に生徒会や部活動といった学校内での教育活動で実績を上げた生徒が対象となっています。このたび「自己推薦」を導入することで、学校外での活動（クラブチーム、ボランティア、習い事など）で頑張った生徒たちも、大口高校で学びたいという明確な意志があれば推薦入試を受検できるようにしました。多くの皆さんがこの「自己推薦」にチャレンジしてくれることを期待しています。

大口高校は、これからも地域に愛され、地域に信頼され続けるために、進化を続けていきます。校長 吉満 庄司



感動の修学旅行

12月3日から6日まで3泊4日の日程で、2年生が京都・奈良・大阪に修学旅行に行ってきました。4日とも天候に恵まれ、特に2日目の自主研修は、自分たちで行き先を決めて思う存分、秋の京都を満喫しました。翌日は、終日U.S.Jで思いっきり楽しんで、たくさんの思い出を作ってきました。



「県議会探訪記」

12月7日、KTS鹿児島テレビの「県議会探訪2024」という番組で、大口高校生6人が鹿児島県議会を訪れ、議会議事堂の見学、本議会の傍聴、そして議員との意見交換などを行った様子が紹介されました。

意見交換では、国際交流、少子化問題、特別支援学校の設置などについて、深く掘り下げた議論をしました。

動画はYouTubeでも配信されており、県議会のHPから見るができますので、見逃した方はぜひご覧ください。



伊佐にヒカリプロジェクト

11月30日、菱刈まごし館で伊佐にヒカリプロジェクト2024の点灯イベントが開催されました。

今年は大口高校生が企画の段階から携わり、ソーラーLED電球と竹灯籠を組み合わせたイルミネーションなどを制作しました。

当日は書道部のパフォーマンス、バンド「NOVICE」の演奏、音楽部のハンドベル演奏などで大いに盛り上げました。

なお、イルミネーションは2月22日までです。ぜひご覧ください。



大口高校・伊佐農林高校「研究成果合同発表会」

1月16日(木)13時30分から、伊佐市文化会館大ホールにて大口高校の「総合的な探究の時間」と伊佐農林高校の「課題研究」の研究成果合同発表会を開催します。今年、両校の生徒に加え、大口中央中学校・菱刈中学校の生徒（2年生）、さらに保護者や一般市民の皆様にも聴いていただくことになりました。

大口高校は各学年の代表者が1テーマずつ発表します。1年生が商店街活性化イベントの実践、2年生がInstagramを使った大口高校PR作戦の経過、3年生がコンピュータを使った作曲について発表します。伊佐農林高校は、農林技術科と生活情報科の代表の生徒たちが、SDGsの視点を取り入れた研究や学校活性化に向けての取組、そして個性の光るドレスショーなどの発表を予定しています。

この機会に、伊佐の高校生たちがどんな研究活動をしているのか多くの方に知っていただければ幸いです。



昨年の発表会の様子

「ふるさと歴史講座（山野線と伊佐の繁栄）」要旨その2

今月号では、11月6日～30日に開催した「大口高校ふるさと歴史講座」の第2回目から第4回目の要旨を紹介します。

【第2回目】11月12日(火)18:00～20:00

講師：吉満庄司先生（大口高校 校長）



鹿児島県歴史資料センター黎明館の学芸員時代から吉田初三郎が描く鳥瞰図に関心を持ち、『鹿児島史学』第51号に「吉田初三郎の『鹿児島市鳥瞰図』」という論文を執筆。

これまで、初三郎が鹿児島を描いた作品としては、鹿児島県、鹿児島市、そして林田温泉（霧島温泉）が知られていたが、大口高校に赴任してから昭和11年に大口の町を描いた作品があることを発見し、所蔵先の青森県の資料館よりデータを提供してもらい、「ふるさと歴史講座」で紹介した。

テーマ：「吉田初三郎が描いた『大口町鳥瞰図』を読む」

吉田初三郎は大正から昭和初期に活躍した画家で、鉄道を中心とした観光地や都市の鳥瞰図を数多く描き、「大正の広重」と称されるなど人気を博しました。初三郎の作風は極端なデフォルメが特徴で、大胆な構図と鮮やかな配色による豊かな表現に彩られ、「初三郎式鳥瞰図」と呼ばれました。彼の作品は観光ガイドブック的な存在で、鉄道網の拡大と個人旅行の流行に伴い需要は増えていきました。

大口町の鳥瞰図は、大口駅を中心に役場、警察署、郵便局、そして旧制大口中学校、高等女学校、伊佐農林学校などが描かれ、牛尾には大口金山の立派な建物も見えます。特産品として、芋焼酎ではなく米焼酎が紹介されています。

大口町が初三郎に鳥瞰図制作を依頼した背景を考えると、当時は大口金山の採掘が絶好調で、線路の枕木用材木の産出で大口の町が繁栄を極めていたことが挙げられます。外から人や物が続々と入ってくる時代だったからこそ、ガイドブック的な作品の需要があった訳です。大口はまさに鉄道とともに発展した町であったということがよく分かります。

【第3回目】11月15日(金)18:00～20:00

講師：小林善仁先生（鹿児島大学法文学部 准教授）



長野県出身。佛教大学大学院博士後期課程単位取得退学後、平成22年に鹿児島大学法文学部に赴任。鹿児島城下町をはじめ、麓集落や境内地など歴史的集落の景観形成と地域変容を研究するとともに、絵図や旧版地形図などの古地図に関する調査・研究を行っている。今回は、江戸時代に幕府の命令で薩摩藩が制作した「薩摩国絵図」、「薩藩御城下絵図」、そして明治時代以降に軍部によって製作された地図などから大口に関する記載を抽出し、近世・近代の大口について読み解いた。

テーマ：「古地図に見る近世・近代の大口」

地図は現用の地図と古地図に分けられますが、本日は古地図に描かれた大口の発展の様子を見ていきたいと思います。元禄、天保、正保年間に作成された国絵図は、現在では国立公文書館のウェブサイトから閲覧することが可能です。大口地域は薩摩国絵図に、菱刈地域は大隅国絵図に描かれています。大口村と羽月村には古城跡が描かれ、曾木の滝は川内川に「曾木瀧」という注記が見えます。そのことから、国絵図の作成は、軍事的な意味合いを持つことが分かります。

鹿児島県立図書館所蔵の「薩藩御城下絵図」は、鹿児島・伊集院、出水、高城、加治木、そして大口の6枚が現存しています。大口麓については、鹿児島までの距離に加え芦北からの距離を記しており、大口地頭を島津久元としていることから、彼の在任中の寛文・延宝年間に作成されたものと考えられます。大口城に「山城」と記してあり、城跡に関する記載が詳細であるのに対し、麓集落の記載は簡略的であるのは他の地域も同様です。

古地図（絵図）は地域の今昔を知る重要な資料です。郷土教育・生涯学習の資料、観光客用のガイドブック、そして防災（減災）など様々な活用の可能性をもっていることを認識していただけたら幸いです。

【第4回目】11月20日(水)18:00～20:00

講師：小斉平信二先生（伊佐市役所地域総務課市民窓口係長）



大口高校に在学中に山野線と宮之城線の廃止が決定。高校生の自分にできることは何かということを実際に考え、たどり着いた答えが記録を残すことだった。当時、ビデオカメラは非常に高価で手が出なかったため、カメラで全ての駅や列車を撮影し、レコーダーで車掌の車内アナウンスを記録した。

大口市役所に就職してからは、大口歴史民俗鉄道記念資料館の展示にも携わり、また市内の小中高校生に向けた講演活動も行いながら、山野線とは何だったのかということ問い続けている。

テーマ：「大口高校生の残した山野線の記録」

山野線は水俣駅から栗野駅に至る全長55.7kmの路線です。水俣駅を発車した列車は次第に高度を上げていき、鹿児島県境の手前に位置する久木野駅から大川ループ線で高度を稼ぎ、標高439.5mの薩摩布計駅に到着します。その後は、緩やかな下り坂を経て平坦な伊佐平野の中を走り、薩摩大口駅、菱刈駅などを経由して栗野駅に到着します。大川ループ線は線路そのものは残っていませんが、現地に行きますとその跡を確認できます。

私は、父が鉄道マンだったため、父の転勤と共に転校をしました。最後は薩摩大口駅と大口高校のちょうど間の付近に住んでいました。ですから、子どもの頃から鉄道が身近にあり、鉄道とともに成長したと言っても過言ではありません。そして、将来は国鉄（JR）に就職して薩摩大口駅の駅長になるのが夢でした。本日は父が使用していた帽子を被り、父が使っていた品々も持ってきました。

昭和63年1月31日を以て山野線は廃止されました。廃止が決まってから、地元の自治体などが中心となって山野線を存続させるための協議会を作ったり、鉄道利用の促進を訴える運動をしましたが、“時すでに遅し”でした。

鉄道廃止は過去の問題ではなく、今日的な問題でもあります。例えば、肥薩線の川線（人吉ー水俣）は復旧の目処が立っていますが、山線（吉松ー人吉）は全く復旧の目処が立っていません。今、我々は山野線から何を学ぶべきでしょうか。そして、今できることは何かということを実際に考えなければならないのではないのでしょうか。

